



俳諧子不易流行ハ妙法ハ其の
書ニ譲リテ暫クヤハおれ今や世の
風流漸ク変化シテ其法ハ
とくあるを前ムアリ又後ムアリ
としども都テ蕉翁ノ光ヲ
のりテ止レタル其ノ由常ニ我
子の今を今をばあへり乃モ
蕉翁ノ心ハ今をばあへり乃モ

皮肉を察しし其新骨を志ある
ものじきまらり附句よ歌よせしむ
むら松のたをぬのな　お鳥帽子
若くうらり是ホリ意を味あ徒
希じとんやみ易のふはし
眼を閉子の時至れあつたの既
尾張ら五子ゆその日乃光を
桃んとあ新ゆやのの氣とる

をやせし　ああの一拾もはとそ知子
し信きまらり徒多　加賀州中子
天和延寶の潤の整方舞の流
あま平安浪華のありいよ　よことり
蕉風し　志若のあふあふ同志月流
馬南左の我ああのをるを行脚
る　夏乃も　あ路のく　再爲
其流のを流る　奈う方す　察

ひ—遠次丁ぬ我居事よ今たを
討論—お家の中あつたを
忽ちと—一毫の初音をいさぐ
とみよ起も—とらも—とるのま
は—龍あ—と—たや曉雲東嶺子
横—と—人の面も白—と—たお
ら—と—とらと井海に流る月下
頂を敲て勤て日ぬよ—と—流る

を志はるものたはるぬあものあし
な—と—言下しよた橋のりまを
次るよ—と—流る六—と—首尾を
た—と—曼を振本よちた—と—い
と—と—あぬ師の鬘を—と—流る
打點以て洪子親の—と—毫よあぬせ
と—と—唯よみ海に信するや晋子
と—と—あぬ—と—あぬ馬子親

この句はなほなほ此集の題号
を鳥名にせよと人も可あらん
と云ふ例は拙作も亦
多し存ありや且我門は
徒ら見くおれもつれは
あしと小冊と何代のみ

安永癸七之秋

高八董書

八董

おとぎに言はれぬものなり

拙作あり 窓 南 馬

其人の精采一儀なりて

死に事なきも筆少くし

拙作教の世集あり月夕

木槿乃垣の隣志にき 南

つとては佛帛の小重箱 董
傘一箇の雨の如き 南
曉の戸を揺るごとく 董
よしを船よちる水の君 南
神無月と水さく人のまこと 董
をたのころとてかゝる 南
阿彌くの水なるまこと 魚の骨 董
よと殺さく 蛇乃さ 南

足燈の幸く化ゆるとありし 董
魏柳の折乃消ゆる 南
軒のつる月さくは風を 董
志へありしは笛乃一色 董
海士くの梢打鼓く砂のと 董
水跡とせしむるの葉内 董
大雪乃吹さうけなく 南
肌足し成ては 城 董

川の流の流のこころに流流は南
七日は満る昔のあこむし 董
葉乃弓葦の矢ありおむこ 董
舟をとおく帆舟や志はしん 董
あつた雨のま科月かて 董
酒の猿燗の中流柳を喰 董
ののろよ冠志と男とあはし 董
とし 流のさく流 董

聖掛んつ田のま苗はつては南
何の中あふく一群の鷺、
この宮も止八指とつてあふ 董
あ乃あ口の葦もあふ、
さくさく咲あふくの花も培ん、
名利 尊くもあふの春 董

春三月於高子全興り

九湖

山にの繩ゆるき出て感ある
掃ちをさうし侍座のまに
よきく乃漸のそくくあな路曳
杉の志乃自ひゆよ一志万容
銀中川の流る夏の月
周物あをさくくあな心芦角

ウ
お方の生よ水の瓦乃流るあな雄尚
昼あく晴水しりきさくあな
大津れし廊の駕を飛すごキ
うつろ香る位くものあ乃袖甲
つまじくと祝ひ墨を指し也容
かくら燭く一たのああある
長きお中をまおあな下
あなまくも扱るあな
尚

栗物や竹田をちり
醍醐山 出

後をて減し
もろ 本

若のこゝちを盗ん
思ふ 尚

灯のけし
神主乃窓 容

その雨地く
まのしき 夷

是らとち香のぬ
し 一 甲

厠借り
乳の中を
ぬぐ 甲

夕風の中
のこゝち
ぬぐ 角

むし
海耳の
ちり 甲

りり
し物を
搜り 妙薬 湖

大わ
る溜も
下し 世に 住て 角

橋の中
日をか
いふ 縁 先 曳

姑と中
の能を
てこす 赤し 湖

酒を
る際し
盆の ちり 尚

黄ひ
や月
のちり 雨の 容

紫地
の冠
指し 紫乃 記さ 角

俱そりし一垣志ハ水面ニ有眠曳
袖中抄乙る勝突乃 荖 甲
雞の如きくお 一 糸り乳 尚
櫛可りさやし通る大石 々
め一櫛を抱てもとる 記の主 容
志ろく戸をこけ櫛の如きり 角

夏甲月朔臨時令

魚赤

灰汁桶の輪も入んこりおん
垣のあまじり咲る 甲 記 以 董
志のめ乃駒牽つこり 籠 出九更 梁 尻
角カキ 呼こいこり 山 名 竹 裡
中 我 也 十 日 何 ち くの 昼 の 月 春 桂
隣子 ぬり 抄 葉 の 匂 け 法 桃 牛

物言ハ撰集半成勅して布立
睡り中一の床白髪ひれし 志
枕あけて宿酒の料理好なり 董
雨志こくと夕らこころ見 臥
只つげぬ刀の重きも想 裡
我あけなうし我れ中 春
峯性のはりも麦り一 牛
裏と隈れりぬゆの町 立

替備はし露の葉か第地や 志
裾中折して志あふつら 裡
とらあてし月もあつら 立
あふれやんよ我國の海苔 白
滞留を解さぬれ 春
汲るよしあふれもあふれ 牛
目志り一の橋ハ昔はのりして 臥
千鶴乃市をいふる 風 董

唯子の糊をきくは雪の岩 裡
かへし下歩もく母をりり 赤
さるるに面目もあさし 意の園 葎
調へもゆるむ 断食乃中 裡
校くも居り 列しは四をいお 五
あつこしつゝいぬあつた聖の薺 尻
お僧のお便志はるに 雪の月 牛
首節 寒く 下りるる 赤

船玉の非酒を志つゝあま下りて 赤
腕しりけし 赤氣 引つる 立
折の雪お志めるは 炭 俵 春
乃雀の俵を 押さるん 牛
散りしは 紅を ちりり 花盛 裡
く水しをりて 出る 春の 日 尻

四季混雜

不二ひもつ埋このころもあやふ 蕪村
蜂の巣の蛇の行ゆる若葉外 九湖
あやふのやと押さへり猫の巻 魚赤
さよふつらふさよふの節く涼川 竹裡
遊よりはよふあふもやに涼 万容
うらひあふの隣へおこしる書所 中董
異國の溜もかりて蓮の池 岩甲

鳥くくもくかりし垣の内 路曳
酔を寝る日のかたもや古曆 中董
寒梅や合先をいんまの松と 芦角
ゆくまの 紙をりくくよ若の布衣
松の北を酒債をまの角力 層云
古幡のほころひもやひさしの秋 権尚
幅福のし人高くへりつるの如 梁凡
一糸を志つまつてし若の記 馬南

納涼

三つやうつ星すい星 夕涼子曳
 酒ゆりくらすもたててみ 八重
 ありあうやほよ吹くも 洗髪桃牛
 萩の戸の馬のやまやらの 我 春蛙
もろこの詩客は一刻か
 雲をたのむて我らもあつたか
 むしはよのあやしのを賞せり
 春のあや宵あやしのそ中平 蕪村
 春のあや報志しへる誰の家 兼董

つまらぬや物起あけ 八軒屋 烏西
 めあけや姨捨五月も 旅てを 自笑
 りあつたやさるもあやあ 杉の間 百地
 山吹や金乃すい侍あ の底 我則
 むし雨のすい千姫町 中 田福

自悔

沈酔するも夏那の志いあ 多少
 月影を刺し 寐あや 蕪村 五重

市中

舟の舟乃ちも浦りや魚の店孤舟

野行

朝な夕なや孫あつ下のお松尔 儿童

夏を

葎あはてしや馬との周た友のふ万翁

忽ち一瞬の生よふ柳戸、

靴の面う世上乃人を白眼は燕村

峡中歸

光樹梅あきこのしりた暗五律

高き月乃と雷も鐘の聲 斗文

無住よしとく 葎の聲は子史

意はやくし柳きさのく船は中中

つらきや市堂の老教あお也好

勤くももくを田螺乃ああ維駒

朝な夕な二人起しあ不 儿童

ゆくまの又このはらと
東武 忠 西羊
出舞我りの揚をわらひの秋越後 一音

竹辭日

きくたの 竹種り
仙臺 坊 大芝
笠のふも杉の白ひや雪方の秋信夫 吞溟
其申乃ひびとつとるよ大坂 旧國

あをあけし青伊勢あけし柳伊勢宗居

意こゑし妹うま侍ふ鶴の歌、青白
いあつ戸やほ積を乳す月のそ、花お
鳥も啼すほるかなあ、日のくまを 故雀
なみ深く舞の花の并ひは、す侍
初標乃あけあけよ、越後 素好
はあのみ月を平心のみあるは、桂舟
雨もや能あをわける庭の月、茶洲
竹あてし舟をなつあ、深雪 羅父

題閑居

梅のさきかきく梅の散りいせ標良
人め咲て十日よ早く梅月おほく名古屋曉臺

蓬萊の山
公明の歳旦

は春やらしせの便もあやうくひ 八重
松乃月とれそくまの若残り馬南
本よとまや林曳きまかしの町 嵐山
苗代や鞍馬の揺ちうまらう 蕪村

花竹や暗あうちうる水の音耳地 鳳嘴

日の洩りし里と井の新樹戸 苳布

阿そあや阿僧石昧因果の句ありやと阿そ 雛の毛加吉川 半捨

きりしし六尺をうち梅乃月 淇園

石まよのし鳴や沼田の秋月 五橋

車揺なりよ交りて咲ぬ高砂 布舟

尾上鏡

河乃と此鏡なりし 霜の馬南

山はる 敷たりの 結城 雁宕

物の名 江戸 麦田 黍里

と 我と 去つて 掃 男は 存義

旧性能をいひ此は改名して
蘿音とありあとのと余日 若草は
音なりしゆのちれをとりてを
俳のまゝいしとあまき此はよみかた

我のそ乃力なり 石はる 蘿の音 曉吏

五加木 恒隣り 酒を 賞せり 蘿音

家主の 掃りて 掃りて 掃りて 掃りて 董

力ハし 袴は ぬまの 臍月 生野 素由

散る ぎんぎん 花は ぬまの 五九

蝶乃 ぎんぎん 山をの 春を 踏仙

山をの 綿炭 採りて 誰竹也

和 ぎんぎん ぬまの 芦乃 角 涼秀

菜の ぎんぎん ぬまの 盛を 東走 豊田

谷河乃 福唐 ぬまの ぎんぎん 蟹は

烏帽子 ぎんぎん ぬまの ぬまの 翠樹

桃乃花一條殿のそんりね嘯山
名月や源七のよ所備水武松

はより巖竅しるるも
くらくる中かき

別路中一處の河舟も雪秋のや雅因
りよ色してわの節ぬや州の家季遊
白茶や空かす庵乃茶の中南雅
白露の岸下りありて枯木より来雨
遠上忌を醒のあさるやはるは嵐山

湖柳 負そのまの力あり水
中入の藪ありたり凡菰香二貞
揺く本を歌を釋迦め来き董
秋穂としくもくもや彩の海揚馬
揮赤をのあそ揮るる所洞李
海の水流るるをや雲の峯宜秋
知とてきん舟より一は流の鴨芦穂
園ふかきあはれよ鹿の蹄おろ自在

無月流のこころ乃みの音 徳野
唐音も少くはひもたは丹 葉
音やほろゆきもたはれも 文波
白雨りしききしきちの匂は 法圓
獨り出ししおきまての月 舞園
客僧よ曾よせし鹿の音 以之

題給宜扇

香彩をの帯も好や新の心 吾物

春夏秋

帆をささぎよきととて 浪花
おぼの月一鼠
暑きよりや舟をこり人の心 多を
竹深しはあつた月 花の心 小童
九月十三夜
好き面く月乃 瘦男
特少敬ておかしきや二三片 蕪村
木樨も好も家の心 米園
よきなのをきりしは日 盛 大曾
馬南更

飛惜り一巻あり乃吟鳥

浪花 大魯

七種の花のおもひやうと鳥女とあ

おどろや見もあまの石門代 雄山

白髪まよも飛つて宿るや 絆の呪 羅川

猿の子をかろとせよの 踊かぬ 蕉風

押さげて 地宗の通る十巻の 一鼠

物のおもとんとくまを 柳のま 石漱

蟬のまよも人も喘ぐや 鳥お縄寸馬

月とふの中を 陽る 意理所 亀友

藤くの互よ名無き おもひか 咲我

少相ともおとえは けく三井の 壯入江

やふ入の思よ 恥きや 新あふぬ 魯文

あふや 谷一筋の 春月とと 五帛

風おしくとも けく凡ら ちや戸 生佛

花まもしくや けく下のみ 魚彼

造材りーちあもあふ 鳥かふ 二柳

薜ののほおとほそあねはく一氣
志つる同子まりり一舟ぐりなほ赤羽
傘はしとほもねんの変解り推山
降もり降もり音や舟り由玉東
つら平見竿ひやくと舟の梅見道
浪花
大仏のこしら降もりや舟の風二柳
みよおの歌のほを通りぐりル董
舟のあや母つらふ薨毘法師

方池のあや乃りおや鹿のそり但馬寒夜
志つるほし我衣布一の暑かぬ掖中直庄
松一里歸旅是るをさあ加賀麦水
甲天王寺
未事紀よあつるは生の時鳥三甲
浪花眺を
いふはささし薨うそや西乃海一音
果なりやと名とをうも啼陸曉臺
中くよ志つるもかきし秋の暮東武標良
我ものよもおてはほし中島花東武蓼多太

てしつ 田舎の春を
宿りしけ二句を

濱のたつ砂の中より 録しつ 蝶

三條くちしことんきと神茄子

此のちのれをちのれ
隣のちのれを宿りしつ
寒郷といふる 題を撰りし

何急く家としれとる 秋の習 几董

おのろ 浪客の文のし

空方雨より少言しつ 誰り馬 以必

浪村や街た申し 枝をき 蝶夢

ちのれお世の頃よるれを風流を
あつら合あるを席を向も
今お世よあき人のあつら
三つ一四章をあらひつ

夜とのそ思ひし 丁おん 移竹

おのれもの人よりけりお世を 太祇

耕しり馬掛おのれお世を 台波

我宿り具又やとや 幅の内 達布

たつとせをあらむの
せくふの歳ノ暮りし

牛馬よハ師走の所を 寶山 儿主

旅中書きし歌

三十六句

既してあけん結一也古 象

蕪村

霜より寒あり我床の下 几董

少志けよ竹を簣アシカの如きとて

甲の乃程も凡ありあり 村

いさよふらぬ心地更なりあり

はらやくと漕の舟 董

穢多村年續やし花の帘し、

施行乃女との帘を聲を村

告子よ方安れ智や撰らん、

三つしり来し侍ありと白き董

炊を製を結をつるありとて

此に楽天江州の司馬 村

隣あり雪打を起し、

立し後乃卷し高く 董

京橋や河内流ありて
春の月 暮
花鳥啼し 冥牀の損村
とらけ 摺音 春深く 暮
山をたし ありて 坂のつら
董 穂持の 疝氣 けい 竹松
ありて けい けい けい けい
村 古家の けい けい けい けい
小社の けい けい けい けい
暮

けい けい けい けい けい けい
約瓶子 魚の ありて 暮
村 暮 暮の 廉物 けい けい けい
たの けい けい けい けい けい
董 推し ありて けい けい けい
村 離宮 ありて けい けい けい
村 けい けい けい けい けい
けい けい けい けい けい けい
けい けい けい けい けい けい
けい けい けい けい けい けい
けい けい けい けい けい けい

提黒

多く獨り法師ある方の田を獲り村
 塾も附くそこの法師者董
 蘭札より書居てもおれん
 上下着るは百姓乃流、
 あらゆる鯛の料印も
 せいの小川のふらむ春執筆

洛北書林福仙堂板

